

一月二三日(日)

亜衣の着替えを気かけながら、洗濯物を干している間、早くからウチに来ている敬子が、映美の相手をしてきている。妻の芽衣は朝のスキンケアを終え、敬子と何か話している。

洗濯を干し終え、掃き出し窓から中に入ると、空になった洗濯カゴを芽衣が脱衣所へ持って行ってくれた。一人で靴下も履けた亜衣は、テレビの前に座って熱心にプリキユアを見ている。もうそろそろ、新シリーズの時期。画面の中はクライマックスにふさわしい盛り上がりを見せている。

映美を膝の上に乗せている敬子の向かいに座った。

「保育士も向いてるんじゃない？」

「向き不向きの前に、資格がないから」

「今から取ればいいじゃん。看護師とダブルライセンスなら、引く手数多だろ？」

「保育士、馬鹿にしすぎ。簡単じゃないって」

敬子は、「ねー」と映美に同意を求めた。映美は楽しそうに「ねー」と反応を返す。

「じゃあ、復職すんの？ そろそろ半年でしょ」

「ま、おいおいね」

看護師一筋だったのに、去年の秋頃に離職してから、自由気ままに生活している。手が空いているからと祖母の介護、老人ホームへの入居手続き、祖母宅の整理なんかも任せつきりだから、無碍に「働け」とも言いにくい。

「あ、そうそう。こんなのも出てきたから、今のうちに渡しておくね」

敬子は自分のカバンから、薄い額に入った賞状と手作り感あふれる冊子を取り出した。実家に置いてきたつもりだったが、祖母の家に仕舞ってあったのか。

「あ、懐かし〜」

脱衣所から戻ってきた芽衣は、五冊ある冊子の中から一番上にあつた分を手にとった。無造作にパラパラとめくっていく。

「そこに棚に、飾っておく？」

壁際のカラーボックスに、雑誌が数冊入る隙間は空いている。その上も、賞状

を並べて飾るにはちょうど良い空間がある。芽衣は意地の悪そうな目でこちらを見る。今し方最後まで見た冊子を置いて、次の冊子に手を伸ばす。

「な〜んて、冗談冗談」

「でも、表現者なら恥ずかしがっちゃダメだよねえ」

「お、さすが敬子ちゃん。分かってる〜」

女二人で楽しそうに笑い合う。賞状と冊子をテーブルの片隅に寄せ、端の方にまとめおく。芽衣は時計を見上げて、「さて、あとはよろしくね」と言っ、寝室へ向かった。

敬子はスマホを見て、今来た通知の詳細を読み上げる。

「あっちはエキスポシテイで、コーヒー飲んでるって」

「え、もう着いたの？ 流石に早すぎない？」

テレビ画面では、まだプリキュアが踊り始めたところだ。

「ゆっくり待ってるから慌てずに、だつて」

敬子は「とりあえず、了解つ」とメッセージを返した。僕は亜衣と映美の上着を取ってくる。冷蔵庫に貼っていた「フードトラックEXPO」のチラシも外し、万博公園までの道のりに思考を巡らせる。

スムーズに抜けられそうな道をシミュレートしている間に、敬子は僕の手から二人の上着をとって、プリキュアを見終わった亜衣にも着せ始めている。

「じゃあ、行きますか」

敬子の合図で亜衣が玄関に向かう。敬子は映美の手を引いて靴を履かせてくれる。テレビを消し、食卓の上を軽く片付け、車のキーを取って外に出た。

初出 令和三年二月一八日 NXXN (旧サイト) にて公開